

2025年度 実践活動成果報告書

所属機関名	土の根会
申請者氏名	神山 直子
活動テーマ	共育文化の創造と仮親教育力の社会化

【活動の概要】

花さき保育園では「共育文化の創造と仮親教育力の社会化」をテーマに、子どもを中心に据えた学びと地域協働の実践を継続・発展させた。入所者の体験談を聞く会、国立療養所多磨全生園（以下「全生園」と記す）の園長による講話、自然観察会、発達支援の視点を踏まえた専門的アセスメント、音大生等による音楽活動など、多領域の研修・体験活動を計画的に実施した。これらの取組を通して、保育者・保護者・地域住民・入所者・学生が“仮親”として子どもの育ちに関わり子どもの感性・表現を起点とした学びの場を形成している。

一方で全生園および国立ハンセン病資料館（以下「資料館」と記す）との協働を深めるために着手した「花さき保育園オリジナル地図作り」は令和7年度後半に全生園内で大規模な樹木伐採や工事が始まり準備段階に留まっている。

さらに、2月7日・21日の資料館主催研修会への参加を契機に資料館との絆が深まり、令和8年12月に資料館の館長による講演会の実施が確約された。これらの取組は、共育文化を地域に根づかせる基盤となり、歴史と自然を往還しながら学び合う環境を広げ、地域全体が子どもの育ちを支える文化的土壌を強化する一歩となった。

【活動の内容及び成果の詳細】

1. 活動内容及び成果（本活動によって得られた新知見、成果等）

この1年間の活動は、子どもを中心に据えた「共育文化」を地域に社会化するため、歴史・自然・人権・音楽・発達支援の五領域を往還する学びとして展開された。

まず、10月4日の入所者体験談を聞く会では、地域住民・職員等がハンセン病回復者の語りに直接触れ、歴史と人権を「体験として受け止める」場が生まれた。語り手の表情や声の揺らぎに寄り添い、相手の気持ちを想像する体験は、仮親としての大人の役割を再確認する契機となった。

発達支援の視点を踏まえた専門的アセスメント（10月・3月）は、宮本紀夫先生・山中ともえ先生の助言により、園児の育ちを丁寧に理解する取組として深化した。遊び・対人関係・感情表現・集中の変化などを記録し、環境調整や関わり方の方向性を整理することで、保育者の発達理解が大きく向上した。また、就学に向けた支援体制として、発達理解と合理的配慮を整理する「就学支援シート」を活用し、小学校側に必要な情報をわかりやすく共有する仕組みを整えた。これにより、入学後の支援が途切れずつながる体制が確立しつつある。

自然領域では、富田広先生による秋の観察会（10月25日）、園内研修（11月3日）、七草粥の会（1月6日）、親子自然観察会（5月23日）、アレチマツヨイグサ観察会（7月24日）を実施した。これらの活動は、子どもの感性・探究心を引き出し、保護者のまなざしを育てる場として機能した。親子が自然を媒介に対話を重ねる姿は、共育文化の具体的な形であり、地域との関係性の再構築を促した。

人権領域では、全生園園長による講話（11月21日）や「あつまれ人権の森」への参加（1月24日）に加え、2月7日・21日の資料館主催の研修会への参加が大きな転機となった。資料館においてハンセン病の歴史的背景や人権課題について直接学ぶことで理解が深化し、資料館との協働が制度的に強化された。研修後、資料館館長より令和8年12月に講演会を実施する確約を得たことは、共育文化の社会化に向けた重要な成果である。

音楽領域では、音大生による「楽しい音楽」活動（複数回）とクリスマスコンサート（12月18日）、春のコンサート（5月27日）を実施し、子ども・保護者・学生・職員が感性を共有する場が形成された。生の音楽に触れる体験は、子どもの情緒の安定と表現力の育ちに寄与し、学生にとっても教育観を深める実践となった。

また、資料館との協働を深めるために着手した「花さき保育園オリジナル地図作り」は、全生園内で大規模な樹木伐採や望郷の丘の工事が始まったため、今年度は準備段階にとどまった。環境が安定し次第、子どもの行動や学びの軌跡を記録する基盤として再着手する予定である。なお、当初予定していた地図作成費は図書費に振り替え、保育の充実に資する書籍の整備を進めた。

これらの活動を総合すると、本年度は「語りの質」「関係性の変容」という文化的指標が明確に深まり、資料館との協働強化という新たな成果も加わり、共育文化の社会化に向けた確かな進展が得られた。

2. 今後の活動の見通し

今後の展望として、花さき保育園は「共育文化の中核拠点」として、理念の深化と関係性の再構築を継続していく必要がある。本年度の成果は完成形ではなく、むしろ次年度以降の発展に向けた出発点であり、園・家庭・地域・教育機関が連動しながら子どもの育ちを支える文化的基盤をさらに強固にしていく段階に入ったといえる。

第一に、資料館との協働を制度的に位置づけ、歴史・人権学習の体系化を図る。資料館館長による令和8年12月講演の実施は、共育文化の社会化に向けた象徴的な取組であり、園児・保育者・保護者・地域住民が同じ学びの場を共有する契機となる。資料館を「日常の学びの場」として位置づけ、これまでに作成したカード・メダル・地図などの教材を活用し、子どもの主体的な来館を促す仕組みを強化することで、歴史と人権を生活の延長として学ぶ文化を根づかせたい。

第二に、今年度は準備段階にとどまった「オリジナル地図作り」を、環境整備の進捗を見ながら再着手する。工事後の新しい環境を踏まえ、子どもの行動・学びの軌跡を記録する基盤として再設計し、資料館・全生園との協働教材として発展させる。地図は単なる案内図ではなく、子どもの視点で地域を捉え直す「学びの記録」として機能し、園児の探究心を育む重要なツールとなる。

第三に、外部講師による継続的な指導を受け、アタッチメントの視点から学びをさらに深めていく。乳幼児期の「この土台」を支える関係性の理解は、共育文化の根幹であり、保育者・保護者・地域の大人が“仮親”として子どもに寄り添うための重要な基盤となる。子どもが安心感を得て探索へ向かう「安心感の輪」の概念を保育実践に丁寧に取り入れ、日常の関わりの中で子どもの情緒の安定と自発的な挑戦を支える環境づくりを進めたい。外部講師による継続的な講義と対話は、保育者の専門性を高めるだけでなく、園並びに地域全体の保育観を深める学びの核となっている。

第四に、音楽活動の社会化を進める。音大生との連携を深化させ、学生が地域の教育資源として機能する仕組みを整える。園内外の場での音楽会開催の実現を目指し、世代間交流の象徴的な場として位置づけることで、音楽を媒介とした感性の育ちと地域のつながりをさらに広げていく。

第五に、歴史・人権を横断する学びを体系化し、他地域への発信を進める。資料館・大学等の研究機関との協働による教材開発を視野に入れ、地域に蓄積されてきた「語り」や実践知を丁寧に記録・保存する仕組みを整えたい。語りのアーカイブ化は、単なる記録ではなく、次世代へ学びを継承するための基盤となり、共育文化の理論化とモデル化を支える重要な営みである。こうした蓄積は、花さき保育園の実践を地域外へ共有する際の基盤となり、全国的なネットワーク形成にもつながる。

最終的には、花さき保育園が地域の文化的基盤として機能し、「子どもを真ん中に置く社会」の構想を広く社会へ発信することを目指す。他地域との連携、紀要等での発信、行政との協働を通じて、共育文化の社会的広がりを創出し、子どもの育ちを地域全体で支える文化の確立へと歩みを進めていく。

3. 本年度の発表、活動報告書等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

研究紀要『ジャーナル教育と時間 第28号』に投稿を予定している。